

手話と「ハンドトーク」

門 秀彦

プロフィール
「HAND TALK」をコンセプトに、絵画作品の制作の他、国内外でのワークショップやライブペインティングをおこなう。その他NHK「みんなの手話」、フジテレビ「めざましテレビ」等のアニメーション作品の制作、宮本直門、佐野元春、HY、大澤誉志幸等のアーティストを手掛けるなど、創作は多岐に渡る。著書に、『ハンドトーク ジラファン』（小学館）、『RING BELLS』（ぶんか社）、『世界がこんなに騒がしい日は』（シャイ乙）他がある。

手話は体で表現する「言葉」であり、目に
見える「声」である。

僕は両親がろうあ者なので幼い頃から父や母の「声」をこの目で見てきた。優しい声、楽しい声、怒りの声、そして悲しい声。父や母の「声」はいつだってストレートに伝わって来た。もちろん見えるのはろうあ者の「声」だけじゃなく、健聴者の「声」でもある。聞こえないことをいいことに、顔では笑顔を作りながら哀れんだり、蔑んだりする者の「声」は、ひどく気味の悪い「声」に見えて、幼い僕には恐怖だった。しかし、健聴者の「声」に感動することもある。それは、ろうあ者である父や母と、手話を知らない健聴者が、筆談やジュエスチャーですつかり仲良くなってしまう光景を見た時だ。僕の幼馴染などは、うちに遊びに来ると、父や母とオーバーな身振り手振り顔の表情を思いっきり動かして騒がしく会話して、一緒に飯を食い、時には抱き合い、そして泣くのだ。その「声」は父と母だけではなく、その場にいる僕にも伝わるほど。その幼馴染は十代の頃にはかなりやんちゃで悪さもした男なのだが、や

がて立派な大人になった今でも「お父さんの優しさに何度も救われた」と礼を言う。父と母は、最初から相手を理解しようとするのではなく、ただ相手を受け入れるのだ。そして笑いかけて一緒に飯を食うのだ。

僕が描いた絵本『ハンドトーク ジラファン』には、手話で会話するジラファンという動物が登場するが、モデルとなったのは僕の父と母だ。ジラファンは喋るのが苦手な健聴者の子供「ムール」と出会い、最初は会話を通じないが、お互いがお互いを受け入れる事でやがて心が通じ合うという物語。ここでいう「ハンドトーク」とは、いわゆる手話（サインランゲージ）だけを指すのではなく、人と人をつなぐ目的の音楽や、みんなで一緒に描く絵、感情や祈りを込めて踊るダンスや、親が子を想って作る手料理やお弁当も「ハンドトーク」と呼びたい。

父と母の手話が教えてくれたハンドトーク。それは特別な事ではなく、相手に話しかけ、相手を受け入れる方法。きつと誰しも、自分なりの「ハンドトーク」を持っている。

月刊
みんな

5月号目次

- | | |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
手話と「ハンドトーク」
門 秀彦</p> <p>特集 手話の世界をめぐる</p> <p>2 手話の世界へようこそ
菊澤 律子</p> <p>4 手話をとおして見る新しい世界
木村 晴美</p> <p>5 コーダにとっての「手話」とは
中津 真美</p> <p>6 聴者が手話を学ぶ —— 第二言語としての日本手話習得
飯泉 菜穂子</p> <p>7 台湾でのフィールドワークをはじめのまで
相良 啓子</p> <p>8 日本手話と香港手話を比べてみると
池田 ますみ</p> <p>9 手話展示の空間と時間
井上 史雄</p> | <p>10 OOLでみました世界のフィールド
英霊の記憶保存
黒田 賢治</p> <p>12 みんなく Information</p> <p>14 想像界の生物相
人魚とジュゴン
—— オーストラリア・アーネムランドの神話と美術
小山 修三</p> <p>16 新世紀ミュージアム
アシウィ・アワン博物館・遺産センター
伊藤 敦規</p> <p>18 手芸考
中国雲南省モンの刺繍から手芸を考える
宮脇 千絵</p> <p>20 ながなんちゃ
ナンが名ちゃ
寺村 裕史</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|